論文

1920年代以前に日本で刊行された図書館用語集の検討

Examining Characteristics of Library Glossaries Published in Japan by the 1920s

仲　村　拓　真
（図書館情報学）

NAKAMURA Takuma
(Library and Information Science)

要　約

本論文では，1920年代以前に日本で刊行された図書館用語集の特徴について明らかにすることを目的として，用語集や図書館用語をめぐる文献を主な史料とした文献研究を行った。結果として，用語集は翻訳のために登場したこと，対象となった言語は，英語が最も多く，次いでドイツ語が取り上げられていたこと，図書館だけでなく，書誌や印刷・出版に関する語が多く収録されていたこと，後年に刊行された用語集は，既存の用語集の見出し語を多く採録していること，訳語は一定していなかったことなどを明らかにした。

Abstract

This paper aims to clarify the characteristics of library glossaries in Japan by the 1920s. Library glossaries and literature discussing library terms were used as guides for the analysis. The primary results are as follows: (1) Authors of glossaries valued the translation of foreign terms. (2) In these glossaries, English terms were the most common, followed by German. (3) Several terms were related to bibliography or publishing. (4) Glossaries published in later years included numerous headwords from previous glossaries. (5) The translations were inconsistent.

1.　研究の概要

1.1　研究の目的および背景

本論文の目的は，1920年代以前に日本で刊行された図書館用語集の特徴について明らかにすることである。

さまざまな学問領域や業界において，意思疎通を円滑かつ厳密なものとするため，専門用語が生み出されてきた。そして，用語を標準化するとともに，その活用を促すために，個人または団体によって，辞典や用語集（以下，まとめて「用語集」とする）が編まれてきた。たとえば，図書館については，学術的なものとしては，『図書館情報学用語辞典』[1]がある。また，実務的なものとしては，『最新図書館用語大辞典』[2]や『図書館用語集』[3]が知られているであろう。

また，用語集は，その学問領域や業界を総合的に反映したものとして捉えられてきた。そのため，各学問領域や業界における知識を検証するにあたって，用語集を分析することが行われてきた。実際，図書館情報学や図書館界の様相を捉えるために，図書館に関する用語集は，検討の対象となってきた。

たとえば，小田光宏は，図書館に関する辞典の見出し語に着目し，収録状況や重複を確認することで，図書館界における用語の特徴を捉えようとしている[4]。また，堀込静香が，司書養成課程のためのテキストブックに付された索引を分析しているが，これも図書館に関する用語に着目した研究の一つして，位置づけることができよう[5]。

そして，用語集は，編纂された時代の言葉を表すものとして，歴史研究における史料としても活用されてきたといえる。日本図書館史研究においても，特定の概念を追究するために，用語集の記述が手がかりとされてきた。たとえば，石川敬史は，移動図書館の成立に関する検討のなかで，移動図書館に関

する用語の定義を整理している[6]。このなかで，近代に刊行された用語集が参照されている。

ところで，近代においても，後述するとおり，図書館用語に関する議論が展開されるとともに，図書館辞典や図書館用語集を称する著作が刊行されてきた。用語集の代表例としては，1925年に刊行された間宮不二雄編『欧和対訳図書館辞典』[7]（以下，『図書館辞典』とする）と，1927年に出版された小河次吉『英和図書及図書館語彙』[8]（以下，『図書館語彙』とする）が挙げられよう。

しかし，近代日本に刊行された図書館用語集については，次に整理するとおり，その存在が指摘されたり，簡略な説明が示されたりすることはあっても，詳細な分析には至っていない状況にある。また，その背景となる近代日本における図書館用語をめぐる議論についても，十分に検討されてきたとはいえない。そこで，本論文では，近代日本の図書館界における図書館用語をめぐる議論を整理するとともに，図書館用語集の特徴について，検討を行う。

1.2　研究の動向

まず，図書館用語をめぐる議論については，石井敦が記述している。石井は，日本図書館協会の歴史をまとめるなかで，日本図書館協会が用語の統一に関与したことに触れている。まず，1933年の全国図書館大会で用語の統一が話題となり，委員会が設置されたが，立ち消えになっていったことをまとめている[9]。つづいて，1942年に，日本図書館協会に設置された臨時研究企画部において，図書館用語統一委員会が設置されたことに触れており，その協議内容に関する『図書館雑誌』の記事を引用している[10]。

図書館用語集に関する総合的な検討としては，大塚敏高による報告が挙げられよう[11]。大塚は，図書館問題研究会において，用語辞典の編纂を目指すために設立された図書館用語委員会で行われた検討を報告している。このなかで，図書館に関する既存の辞書を検討している。具体的には，書誌情報や，閲覧室や参考事務などの基本と考えられる用語の採録状況を比較しているが，この検討対象のなかに『図書館辞典』と『図書館語彙』も含まれている。『図書館辞典』については，アメリカの図書館学の影響が強いと評価している。また，『図書館語彙』については，欧米の用語をどう翻訳するかに力点があるとみており，和文索引がないことを指摘している。この検討を経て，『図書館用語辞典』[12]が刊行されるが，竹内悊は，この完成を振り返る特集のなかで，これまでに刊行された辞書を列挙しており，そのなかに『図書館辞典』と『図書館語彙』がある[13]。

また，山本昭らも，図書館学に関する用語を検討するために，用語集の特徴をまとめている[14]。この検討では，『図書館辞典』が図書館に関する最初の辞典であることを述べたほか，刊行された用語集のリストのなかに，『図書館辞典』と『図書館語彙』が含まれている。しかし，以上の研究は，検討が広範に及んでいるため，近代について，多くを指摘するものではない。

近代日本に刊行された図書館に関する著作を概観するなかで，用語集が挙げられることもある。佐藤貢は，既存の図書館に関する出版物について整理しており，このなかに用語集がある[15]。具体的には，『図書館辞典』について，標題紙に特長があることなどを指摘しているが，本文よりも附録のほうが分厚いことを批判している。また，『図書館語彙』については簡単に説明してあるもので，便利であると評価している。

このほかに，間宮[16]，小野則秋[17]，大佐三四五[18]，武居権内[19]も，図書館に関する既存の図書を列挙しており，『図書館辞典』や『図書館語彙』を挙げている。しかし，これらの論考においては，刊行の事実が指摘されるのみで，解題などは付されていない。

また，参考図書や特別コレクションに関する書誌ないし目録のなかで示され，解題が付されることもある。弥吉光長は，参考図書について解題をまとめており，図書館に関する文献として，『図書館語彙』を取り上げ，「最も早い辞典で苦心の跡が見えるが訳語は生硬である」と評している[20]。

間宮が戦後に収集した資料である富山県立図書館の「間宮文庫」について，解題が作成されているが，そのなかにも，『図書館辞典』と『図書館語彙』への言及がある[21]。具体的には，『図書館辞典』は，「アルファベット順配列による項目はアメリカ英語を主として他に英語（イギリス），ドイツ語，フランス語などを採用する。各項目には語の邦訳と解説を記載」と紹介している[22]。また，『図書館語彙』は，「図書館用語，製本用語，印刷用語，目録用語，出版および書籍業用語その他をアルファベット順に配列し，訳または解説を記した英和辞典」と記されている[23]。

このほか，図書館界の人物に関する論考のなかで，その人物の業績として，用語集について，言及されることがある。『図書館語彙』を著した小河の図書館に関する業績を検討した文献は見当たらないが，『図書館辞典』を編纂した間宮に関する文献は多い。

間宮不二雄の略歴や業績については，褒章や長寿の祝い，逝去の際にまとめられてきており，間宮自身も自伝的著作を発表しているため，関連する文献は少なくない。また，図書館に関する辞典に立項されていることもある[24)]。

しかし，その記述の多くは，図書館用品店であった間宮商店の活動や，青年図書館員聯盟を主導したこと，いわゆる三大ツールについて評価することに注がれており，『図書館辞典』の編纂については，記されていないか，刊行したことを触れているに過ぎない[25)]。たとえば，もりきよしは，間宮の業績を振り返るなかで，間宮が図書館用語の統一を目指して，『図書館辞典』を編纂したとするが，その詳細は述べられていない[26)]。

そのほか，間宮の業績を追究したものとして，小黒浩司が，1936年の上海訪問を中心に，間宮と中国図書館界の交流を検討したことが挙げられる[27)]。しかし，この論考では，『図書館辞典』の編纂は，検討の対象となっていない。また，志保田務は，間宮が日本図書館協会の『図書館雑誌』と，青年図書館員聯盟の『図書館研究』の編集に携わったことを手がかりに，間宮の図書館に対する意識を探っている[28)]。ここでは，間宮が，『図書館研究』では片仮名表記を志向していたが，『図書館雑誌』では平仮名表記を用いたことについて，『図書館辞典』が平仮名で組まれていることに言及するにとどまっている。國枝裕子は，間宮による山形市男子国民学校への関与を取り上げ，間宮の学校図書館に関する考え方を検討しているが，『図書館辞典』については触れられていない[29)]。

以上から，日本図書館協会において，図書館用語の統一が検討されたこと，間宮が用語の統一を図るために『図書館辞典』を編纂したこと，そのほかの用語集として，小河の『図書館語彙』があることが，これまでに指摘されてきたといえる。しかし，これらの記述は，いずれも，検討の目的は他にあるものであったため，短い言及に終わっており，また，断片的なものとなっているといえる。

1.3　研究の意義

以上の状況をふまえれば，本論文の意義としては，次の2点を挙げることができよう。第一に，用語集を検討することは，新たな視角から，近代日本の図書館界を捉えることが可能となろう。用語集を近代日本の図書館界の様相が反映されたものと捉えるならば，用語集が示された背景や，用語集の見出し語を概観することは，近代日本の図書館界を検討することにつながっているといえよう。

第二に，用語集の史料としての有用性を高めることに貢献しうる。用語集を活用するためには，史料批判として，その用語集の妥当性や特徴を判断する必要がある。本論文によって，用語集の概要や特徴を示すことで，史料として活用しうる可能性が高まることが予想される。

1.4　研究の方法

本論文は，文献研究による。主に史料としたのは，図書館用語について言及した書籍や雑誌記事，用語集，用語集に関する書評や広告である。分析においては，個々の用語の変遷や妥当性には拘泥せず，図書館用語一般について論じたものを中心に検討する。

本論文では，検討の範囲を1920年代以前とした。後述するとおり，用語集を概観したとき，1920年代以前と1930年代以降では，内容や特徴が異なると考えられるからである。本論文の関心からすれば，1930年代以降の検討も重要であるといえるが，この検討については，別稿に譲る。

なお，旧字体は，新字体に改めた。また，文献のなかには，図書館の略字（囗のなかに書）を用いたものがあるが，これは単に「図書館」と表記した。

2.　図書館用語をめぐる言説

先に見たとおり，図書館用語をめぐる言説については，石井によって言及されてきた。しかし，石井の論考は，日本図書館協会における事業を中心としたものである。そこで，用語集の検討にあたって，その背景として，図書館用語をめぐって，どのような言説が示されたか，整理しておく必要があろう。なお，本論文で分析する用語集は，1920年代以前のものであるが，言説については，近代を通じて確認した。

整理の結果を先取りすれば，1910年代，1920年代，1930年代，1940年代において，それぞれ議論が展開

されていた。そこで，以下，各年代に分けて，記述を提示する。ただし，1940年代は，厳密には，第二次世界大戦終戦までを範囲としている。

2.1　1910年代における議論

図書館用語をめぐる議論として，初期のものとみられるのは，1910年に開催された日本図書館協会の総会に示された議案である。この総会では，評議員会から「図書館用語を一定する事」という議案が出されている[30]。しかし，「満場議論無く，結局之が調査に就き五名の委員を選定するこゝなりて可決せり」とある[31]。このとき，議長によって，「図書館用語調査委員」として指名されたのは，和田万吉，赤堀又次郎，阪本四方太，渡邊又次郎，太田為三郎であった[32]。

以上の検討の成果として示された用語集として捉えられるのが，1912年に，『図書館雑誌』の附録として刊行された「図書館用語」である。この内容については，後述するが，冒頭に，「本稿は，本会総会の決議により，和田万吉氏，太田為三郎氏，阪本四方太氏，赤堀又次郎氏，及び加藤万作氏を取調委員に推挙し，本年二月以来屢々委員会を開き，討究の結果確定したるものなり」と説明されていることから，以上の総会における決議をふまえたものであることがわかる[33]。また，委員のうち，渡邊又次郎が加藤万作に交替している。

また，1914年には，大阪府立図書館の今井貫一が，『図書館雑誌』で，図書館の管理に関する様式等を画一的にすることを提唱しているが，この画一化の対象に「図書館用語」が挙げられている[34]。具体的には，和田らによる用語集をふまえて，「之に準じて和漢書の方にも其特有の用語を定め，其他図書館で用ひまする凡ての専用語をやはり図書館協会で定めて戴き，それを吾々が其儘用ひると云ふやうに致したい」と希望している[35]。その理由としては，用語に相違があることについて，「必要なくして区々にするのは面白くなく，又是れも公衆に誤解を為さしめ，図書館に関する観念が不透明にな」ると論じている[36]。

そのほか，1918年には，詳細は明らかでないが，府県立図書館長協会において，統計に関する用語や様式を統一することが議論されていた[37]。日本図書館協会の総会における意見や今井の提案は，図書館用語一般を想定したものであると捉えられるが，統計に関する用語に限っても，統一の議論があったことがわかる。

この時期における図書館用語をめぐる議論は，盛んなものであるとはいいがたい。大正期から昭和前期にかけて，公共図書館数が急増したことは知られていることであり，これに伴って，図書館関係者数も増大したとみられるが，まだ用語の統一の必要性については，広く図書館界に自覚されていることであるとは捉えがたい。1910年代は，主要な図書館関係者によって，その必要性が訴えられはじめた時期であると位置づけることができる。

2.2　1920年代における議論

この時期の議論は，間宮の『図書館辞典』の刊行をきっかけとしているといえよう。まず，1925年に，間宮が『図書館辞典』を刊行した。間宮が『図書館辞典』を刊行した意図としては，既存の研究でも言及されていたように，「用語の整備は，一面全国関係者の理解に資し，他面入門者の訓練指導にも効果多かるべき事疑ひなし」として，用語の統一を推進するためであった[38]。また，「業務の必要上，英米の参考書を繙くに当り，各巻殆ど用語集と其解説とを附加せざるものなきを見て彼地に於ける斯業の発達が，誠に遇然［ママ］にあらざるを思はしめたり」と認識していることから，海外の図書館界の影響を受けていることがわかる[39]。

これを受けて，1926年に，『週刊朝日』において，山本八三が，「図書文化に黎明をもたらせる新著」として，『図書館辞典』を含む3点の著作を紹介している[40]。このとき，併せて紹介されたのは，田中敬『図書学概論』[41]と新村出『典籍叢談』[42]であった。

山本の紹介では，『図書館辞典』において，free accessの訳語に「開架」が充てられていることを取り上げていた。この点について，田中は，『図書館雑誌』に論考を発表し，従来は「書庫開放」の語が用いられていたが，田中が『図書館教育』で示したとおり，「開架」が適当であることを論じた[43]。この背景としては，後述のとおり，間宮が『図書館辞典』を編纂するにあたって，田中に助言を求めたからであるという。

田中の論考は，木村文麿によって引き継がれている。木村は，田中の論考を紹介したうえで，用語の統一が必要であることを訴えかけている[44]。田中が専門語の使用を認めたことについては，「特に民衆

を相手とする図書館に於て，一般人をひきつけ，理解を求むる上から云つても，出来得る限り専門家の専門語を避く可きである。（閲覧人を目当てとする用語は特に然りである）」としつつも，「只声を大きくして叫びたいのは日本図書館の近世的改革運動はこれからである」とし，「ひとり用語のみにとゞまらず，あらゆる点に於て，多少の不便を忍んでも改革に一歩を進める事は，過渡期にありて先輩となる可き者の義務であり，犠牲ではあるまいか」と説いている。[45]

また，筆名であるが，1927年には，陸窮子なる人物によっても，図書館用語に関する意見が示されている。[46]記事では，「わが国の図書館界に就いてみるに，既に図書館の組織，管理法，施設からが欧米殊に米国からの移植であるやうに，用語は殆どすべてこれ翻訳語である」と，日本の図書館に関する用語は，翻訳語が多いことを指摘し，「われ／＼は所謂用語統一運動には，その効果の上でより大きい期待を掛けることができる」と，用語の統一を目指すことが望ましいとしている。[47]なお，1927年は，小河によって『図書館語彙』が発表された年でもある。

1910年代にみられた統計に関する用語の統一をめぐる議論については，間宮がその必要性を論じている。千葉県立図書館の片岡小五郎が，1929年の全国図書館大会で，図書館調査の必要性を提起した。[48]これを受けて，間宮は，片岡の提案が望ましいものであるとし，「統計用語ノ不統一，統計基礎及様式等ガ各報告者ニヨリテ相異シテ居ル結果，彼是対照シテ見ルト聊カ不徹底ノ箇所ガ認メラレ，折角ノ資料編纂上ノ苦心モ為メニ其価値ガ低下サレル結果トナリマス」と述べている。[49]

以上から，1920年代は，図書館関係雑誌において，用語に関する記事のやり取りがなされ，用語の統一が繰り返し論じられた時期であったとみられる。また，その背景には，『図書館辞典』の刊行があり，つづけて，『図書館語彙』も発表されたことから，用語の統一に関心のある図書館関係者によって，実際に，統制された用語集の編纂が試みられた時期でもあるといえる。

2.3　1930年代における議論

1930年代の議論として，まず，用語の統一が，ふたたび日本図書館協会の事業として提案されることが挙げられる。1933年に開催された第27回全国図書館大会では，和歌山県立図書館から，「図書館用語ノ統一ヲ図リテハ如何」という議題が提出されている。[50]その意図は，「最近図書館事務の各種事項に亘り，極めて徹底的なる研究事項の発表続出し我が図書館界を啓発すること甚だ大なるものありと思料せらるゝも，遺憾なるは図書館用語の統一なき為か議論は往々にして枝葉末節に堕するの傾きあり，斯界の発達を阻害するの感あり」というものであって，日本図書館協会に調査機関を設置し，用語の統一を図ることを求める内容であった。[51]これについて，竹林熊彦は，「此問題は既に明瞭であるから討議を用ひず即決可決を望む」と述べ，議論が交わされることなく，意義なく可決された。これを受けて，1933年12月には，理事会で議論がなされ，[52]1934年に図書館用語調査委員が委嘱されている。委員は，小野源蔵，高橋好三，広谷宣布，波多野賢一，山田正佐，渡辺正亥，塚本勝雄，宮沢泰輔の８名であった。しかし，1939年の日本図書館協会の総会で，理事長の松本喜一が，「数年前に御決議になつて調査を始めて居りました図書館用語に関しまする調査会の如きも，今日未だ総会で御報告致す所に至つて居らないのであります」と述べているように，[53]この調査は，十分な成果を見ずに終わったと考えられる。

大学図書館においても，用語の統一に関する事業がみられる。具体的には，1933年11月に，第十次帝国大学附属図書館協議会が開催されているが，[54]その議案のなかに，図書館用語の統一が挙げられている。[55]検討のために，小委員会が設けられ，委員として，水野亮（東京），田中鉄三（九州），田中敬（大阪），伊木武雄（東北）の４名が委嘱された。この小委員会では，翌年の協議会までに，図書館用語の表を提示することを目指していた。この点については，1934年10月に開催された第十一次帝国大学附属図書館協議会でも議題となっている。[56]これらの検討の成果として，1935年７月に『図書館用語集』が編纂されている。[57]

以上の流れと併行して，1920年代の議論を受け，用語の統一に関する意見のやり取りは，ひきつづきみられた。まず，竹林が，目録法の統一について論じるなかで，用語の統一について主張している。[58]具体的には，「わが図書館界に於ては，既に久しく統一の叫声が挙げられてゐる。目録法の統一は言ふまでもなく，分類の統一，近頃は世間の吹く笛に躍つて，規格統一が主張されてゐるが，一向に統一の実は挙げられ

た様に思はれない」と述べたうえで[59]，著者目録と著者名目録，書目と目録を例に挙げて，「読者は図書館用語が――敢て訳語と言はず――区々として統一なきことを，以上挙げた二三の例によつて，理解されたこと丶思ふ」とし，「私はこの機会に，図書館用語の画一を，日本図書館協会理事者に提言し，適当なる調査機関を設置せらる丶ことを希望する」，さらに，「図書の貸出か，帯出か，図書の借用か借覧か。異同を拾ひ上げれば数多くあらうが，これが統一によつて生ずる図書館員の精神的負担の軽減は，われ／＼が想像する以上であると信ずる」と説いた[60]。

この後，竹林の論考をふまえて，武田虎之助が，目録法に関する概説を３回にわたって『図書館雑誌』に掲載するが[61]，このなかで，「諸用品の規格統一と用語の標準化の運動は，官民挙げての近来の風潮である。（１）わが図書館界に於ても此種の機運は既に早く現はれ「図書館建築の標準」「図書館用品の規格統一」から「標準分類」「目録法統一」等，何回となく繰返し論議されて居り，（２）図書館用語の如さ［ママ］は，洋書の部が協会総会の決議により，和田万吉・太田為三郎・阪本四方太・赤堀又次郎及び加藤万作の五氏が取調委員として挙げられ，明治四十五年二月以来，討究の結果，大正元年十二月に発表されて居る。間宮，小河両氏の辞書の如さ［ママ］も此の機運の産物として斯界に貢献する所尠らざるものである」として，用語集が刊行されてきたことに触れている[62]。そのうえで，「変改と誤用が頻りに行はれて，特に説明無しには，意志交換の用具としての言語の使命を失つたかの奇現象を呈して居る」として，目録法に関する用語の説明を行っている[63]。

用語の統一については，さらに，武田に対して，竹林から意見が示されている[64]。竹林によれば，自身の記事の公表後，林靖一からは賛意を，武田からは異見を示されたという。そして，「とまれ，現在使用されてゐる図書館語彙は，多く舶来輸入語の翻訳である。それはわが邦に於て，図書館学，若くは図書館技術に関する事項が，西欧のそれを輸入する時まで，遅々として発達せざりし故である」と，図書館に関する用語は，翻訳されたものが中心であることを指摘した[65]。つづけて，目録法に関する用語について，武田から寄せられた疑義に答えたうえで，「図書館用語の変化の著しきに，驚嘆を禁じ得ざるものがある」とし[66]，「今後かゝる天才が続々輩出して，次から次へと，新用法を出される，夫でなくても混雑してゐる図書館界は，ます／＼紛糾するであらう。用語統一の急務は，愈々切なるものがある」と論じている[67]。用語の妥当性については，竹林と武田には，見解の相違がみられるが，用語の統一の必要性については，どちらも認めていると捉えられる。

以上の議論を経て，鈴木賢祐も，図書館用語に関する論考を発表している[68]。鈴木は，「数年前一しきり盛んであつた図書館用語の問題に関する議論が近頃再燃して，用語の統一を期する具体的な工作がそこゝに始まつたやうである」としたうえで[69]，目録法や分類法に関する用語をいくつか検討している。用語の統一については，「結局標準的な用語の語彙を作つて出すより外に手はないのではあるまいか」と述べ，「一，語彙の豊富」，「二，はつきりした定義と親切な説明」，「三，外国語を対照すること」を満たし，「直接の作業に関するものの外に書誌学，出版，印刷，製本あたりの範囲に亘つてをればよからうと思はれる」と提案した[70]。

以上から，1930年代には，まず，1920年代に展開された用語をめぐる意見のやり取りが，ひきつづき見られる時期であるといえる。また，図書館関係団体で，ふたたび用語の統一が事業として提案されるようになった時期でもあることがわかる。さらにいえば，用語の統一に関する議論が，次第に，目録法を中心に議論されていく様子もうかがえよう。

2.4　1940年代における議論

1940年代に入っても，用語の統一に関する意見は示されている。中野武雄は，初任者からの希望として，学問として認められる領域には，概論書，歴史書，辞典の３つが刊行されているものであるとして，これらの図書が完備されることを求めている[71]。辞典については，「最後の辞典についても同様で，今では立派のはない。間宮氏の「図書館辞典」も慊らぬし小河次吉氏の「図書及図書館語彙」は文字通り語彙の単なる解釈にすぎない。自分が此に望むのは図書館学に書誌学或は印刷製本等の用語を含めた百科辞典式辞典でその説明の如きも大項目主義と小項目主義を適当に按配し，必要なる語は英独仏位の外国相当語をも附した素晴しいものである」とし，数人で執筆するのが望ましいとして，日本図書館協会

が編纂することが当然の義務であるとすると指摘する[72]。

また，ここまでに，日本図書館協会の事業として，用語の統一が取り組まれてきたことを確認したが,1943年に，再度，そのための委員会が設けられるようになる。まず,３月に臨時研究企画部委員会が開かれ，毛利宮彦から，用語の統一について，提案が示された[73]。そこで，早速着手することが決まったという。その結果，図書館用語統一委員会として,５月に委員会が発足している[74]。委員長が毛利，常務委員が植村長三郎，北嶋武彦，樋口竜太郎の３名，主査委員が岡田温ら７名，諮問委員が石田幹之助ら８名という構成である。６月に，第１回の会合が開かれ，検討する用語の範囲や調査の方法などについて，合意がなされた。８月には第２回[75],10月に第３回[76]と第４回[77]が開催されている。第４回には，波多野賢一が逝去したことと，後述の北嶋が辞任見込みのため，遠藤哲嶺と細谷重義が追加で委嘱された。その後，北嶋と植村が辞任したことが報告されている[78]。

以上の検討の成果として,1944年に『図書館用語集』がまとめられている[79]。なお，この用語集は，元々，用語の統一を提案した毛利の著作において，索引の作成に援用されている[80]。

1940年代は,1930年代にひきつづき，用語の統一が求められた時期であり,1930年代に成立した委員会の成果がうまくまとまらなかったことに対し，改めて用語集の編纂が行われた時期であるとまとめることができる。ここまで振り返れば，図書館用語をめぐる議論は，大正期から昭和前期を通じて，絶えず展開されていたといえる。また，それに伴って，個人や団体によって，用語集の編纂が試みられてきたことがわかる。

3.　図書館用語集の検討

ここまでの議論の整理をふまえ，実際にどのような用語集が編纂されたか，また，それはどのような特徴が認められるかを検討する。

3.1　用語集の刊行状況

まず，図書館員向けに編纂され，近代日本に刊行されたと考えられる用語集を概観すれば，以下のとおりとなる。ただし，「図書館用語」，『図書館辞典』，『図書館語彙』については，後述するものとし，ここでは，それ以外の用語集を示す。

もっとも早く用語集としてまとめられたものは，「図書館用語」であると考えられるが，次いで，図書館員のために編纂されたものが，『図書館雑誌』の附録として示された「図書及印刷語彙」である[81]。これは，東京図書館や京都帝国大学附属図書館に勤めた笹岡民次郎によるもので，タイトルどおり，図書や印刷に関する用語をまとめたものである。したがって，図書館に関する用語集ではない。

また，1927年には，『図書館員必携』が，同じく『図書館雑誌』の附録として刊行されている[82]。これは，間宮不二雄と山本博によるもので，冒頭に，「abbreviation used in book catalogs and bibliographies」とあるとおり，目録法や書誌学に関する略語集である。以上の2点は，本論文の検討範囲である1920年代以前に編まれたものであるが，図書館に関する用語をまとめたものではないため，検討対象から除いている。

1935年には，前述のとおり，帝国大学附属図書館協議会によって，『図書館用語集』が発表されている[83]。これは，各帝国大学附属図書館から，図書館用語の案を募集し，集まった用語を，事務，受入登記，目録，函架書庫，閲覧の5つに分け，アルファベット順に排列したものである。用語の統制は，ほとんどなされていないように捉えられる。

また，1944年には，日本図書館協会からも，『図書館用語集』が示される[84]。この用語集では，用語を五十音順に列挙し，A（経営・事務），B（建築・機具），C（分類・目録），D（図書・書誌学）の4つの記号を付して，用語の領域がわかるようにしている。以上の2点は，用語集の草案と位置づくものであり，完成されたものとはいえない。また，後述するとおり，1920年代以前のものとは，訳語ではなく，日本の図書館界で使われている語を整理している点で異なるといえる。

なお，書誌学に関する辞典にも，図書館に関する用語は見られる。たとえば，1942年に刊行された植村長三郎『書誌学辞典』には，自序に「図書館学即ち管理法，経営法，分類法，排列法，図書館史」とあるとおり，図書館学に関する用語も収録されている[85]。そのため，『図書館雑誌』に書評が掲載されてきており[86]，図書館に関する辞典として参照されることもあった[87]。そのほか，古典社の『書物語辞典』[88]や日本印刷学会の『英和印刷・書誌百科辞

典』[89]も，関連する著作として，挙げることができよう。しかし，図書館に関する用語が含まれていても，これらの著作の関心は，書誌学や出版にあることから，本論文では，検討しない。

3.2　個別の用語集の検討

以上をふまえ，本論文の検討対象となりうる用語集は，「図書館用語」，『図書館辞典』，『図書館語彙』の３点であると考えられる。そこで，これらの用語集を個別に確認する。

このうち，『図書館辞典』と『図書館語彙』は，現代に刊行された目録などに掲載されていたように，近代の解題書誌においても言及されている。たとえば，田中らは，参考図書の解題書誌をまとめているが，『図書館辞典』を「図書，図書館，印刷，製本等に関する用語を蒐めて解説したもの」，『図書館語彙』を「書名の示す通り図書館関係用英語に訳語を対照し，所々に簡単な説明を加へたもの」と評している[90]。類書と捉えられる波多野らの『研究調査参考文献総覧』においても言及がみられる[91]。具体的には，『図書館辞典』は「図書館，図書，印刷，製本等に関する用語を蒐め解説したもの」，『図書館語彙』は「図書及図書館関係の英語邦語を対照し，簡単な説明を附したもの」と説明している[92]。また，天野敬太郎は，国内外の図書館用語集について解題をまとめている[93]。このなかで，『図書館辞典』は，「図書館用語集デアッテ，英語オ中心ニシテ之ニ邦訳オ記シ，尚解釈説明オ記シタモノモアリ又独，仏，拉ノ等意語オ附シタモノモアル。記サレタ等意語ワ各々独立語トシテ取扱イ，同一ABCノ中ニ排列シテアルノデ，書名ノ欧和対訳ナル所以デアル」としている[94]。また，『図書館語彙』は，「ABC順ノ英和対訳辞書デアッテ，図書館，製本，印刷，目録，出版及書籍業ノ用語ヲ含ンデイル。主要ナ語ニワ説明ガ附ケテアル」と説明されている[95]。そのほか，山下栄は，司書検定試験の案内をまとめているが，そのなかで，辞書として，「図書館用語ノ問題ハ特ニ目録学上ヤカマシイ問題ニナッテ居ルガ受験者ハ次ヲ見テオケバヨカラゥ」として，『図書館辞典』と『図書館語彙』を挙げている[96]。

以上のように，解題書誌で『図書館辞典』と『図書館語彙』が掲載されていることから，これらの用語集の存在は，図書館界内外に知られていたことであると推測される。また，後述のとおり，批判はありつつも，山下が紹介したように，図書館に関する基本的な文献として認識されていたと考えられる。

3.2.1　「図書館用語：洋書ノ部」

最初に編纂された用語集と考えられるものは，1912年に，『図書館雑誌』に発表された「図書館用語」である。『図書館辞典』や『図書館語彙』と異なり，単行書ではなく，雑誌の附録としてまとめられた。そのためか，『図書館辞典』や『図書館語彙』に比べて，言及されることは多くないといえる。11ページから成り，冒頭に「図書館用語（洋書ノ部）」と掲げ，編纂の簡略な経緯が記されている。

この成立については，前述したとおりである。ページの左側に，見出し語として，外国語の図書館用語を示し，同ページの右側に，それに対応して和訳された用語が置かれている。見出し語は370語ある。ただし，２つの見出し語に対して，訳語が１つにまとめられている箇所もあるため，見出し語と訳語の数は一致しない。見出し語の排列は，アルファベット順である。見出し語は，複数形で提示されているものが多い。訳語は，基本的に，一語に統一されている。したがって，訳語を統一する役割を果たすことが意図されたと考えられる。冒頭に，「洋書ノ部」とあるが，洋書に限らず，図書館一般に関する見出し語が多くみられる。

この用語集がまとめられたことは，言説の整理で提示した文献にもみられたように，周知の事実であったと考えられる。しかし，『図書館辞典』や『図書館語彙』と異なり，単行書として刊行されたものではないため，その後，多くの議論を巻き起こすものではなかったと評価できる。

3.2.2　間宮不二雄編『欧和対訳図書館辞典』

『図書館辞典』は，単行書としては，日本における最初の用語集と位置づけることができる。著者の間宮は，間宮商店の店主であり，青年図書館員聯盟を主導するなど，図書館界で活躍した人物として知られている。

『図書館辞典』は，1925年10月５日発行で，文友堂書店から刊行された。大きさは，縦約152mm，横約97mmで，横書きである。表紙や外函には「TOSHOKAN JITEN」と記されている。また，背に020.14とあり，これは凡例によれば，デューイ十進法の分類記号である。なお，020は“Library

Economy”で，020.14は“Library terms, definitions, etc. Discussion. For dictionaries, glossaries, etc.”である[97]。

標題紙の後，序文，凡例，目次があり，本文は118ページある。標題紙には，タイトル，附録，責任表示，肩書など，多くの事項が記されている。また，標題紙裏には，版次，部数，印刷日などが記載されている。この点については，序文において，間宮は，今日の和書では，標題紙が飾りのようなものでしかないと指摘し，洋書を参考として作成したと述べている。奥付によれば，定価は１円80銭である。標題紙裏によれば，発行部数は,2,000部である。なお，正誤表と追録が存在する。

本文の後，附録として，近代欧米著述家の雅号と本名，ローマ数字の読方，図書の形状名称と寸法，欧文構成記号法と説明，和文構成記号法と説明，欧文活字割当表が収録されている。近代欧米著述家の雅号と本名は，笹岡民次郎が寄稿したものである。附録の後には,39ページにわたって，和欧索引が収録されている。これは，訳語をローマ字表記にし，アルファベット順に排列したものである。

見出し語数は,705語である。追録には,16語が収録されているので，併せて721語が掲載されていることになる。排列は，アルファベット順である。見出し語につづいて，訳語が示されている。また，見出し語によっては，解説や他言語での表記も記されている。

収録された言語は，英語，ラテン語，ドイツ語，フランス語，スペイン語であり，英語以外は，それぞれ，「（Lat.）」，「（Ger.）」，「（Fr.）」，「（Sp.）」を付して，言語がわかるようになっている。また，英語のうち，イギリス英語の綴りには「（Br.）」，アメリカ英語の綴りであることを明示する必要があるものは「（Am.）」が付されている。また，印刷に関する用語には「（印刷）」，製本に関する用語には「（製本）」の表記が添えられている。

見出し語には，標準的な訳語に加えて，新たに間宮が考案した訳語と，一般的に用いられうる訳語が添えられているものがあり，前者は〔　〕で，後者は（　）で括られている。また，訳語がなく，参照先のみが示されている「を見よ参照」と，訳語に加えて，参照先も示されている「をも見よ参照」と捉えられる項目がある。

言語別に見出し語数を集計したものが表１である。なお，ドイツ語とフランス語が同じ綴りである見出し語が１語ある。表１から，最も多いのは英語であること，ついで，ドイツ語が多いことがわかる。一方，スペイン語は，収録されていることが謳われているものの，実際には１語しかないこともわかる。また，イギリス英語の綴りとなっている語は,３語だけである。

間宮の判定が妥当かどうかという問題はあるが，参考として，間宮が付した表記をもとに，領域を数え上げると，印刷に関する見出し語は73語，製本に関する見出し語は41語ある。ここから，印刷や製本に関する用語も，ある程度収録されていることがわかる。

訳語がなく「を見よ参照」となっている見出し語は,10語だけである。「を見よ参照」が少ない理由は，同義語で，言語が異なっている見出し語については，「を見よ参照」にせず，繰り返し訳語を付しているからである。

なお,1952年に間宮が編纂した『欧・中・和対訳図書館大辞典』は，『図書館辞典』の改訂版と位置づけられるものである[98]。それは，序文で「顧れば1925（大正14）菲才をも顧みず，『欧和対訳図書館辞典』を刊行したことは，図書館関係者間の相互理解を増進するため，共通用語の普及と併せて斯業の振興に多少の寄与が出来ればとの考えでありました。然し旧著には多少の誤りもあり，又十分に意を尽し得なかった点も尠くありません。それにも不拘同書刊行後に，二三の類同書も出され，その中には私の誤述をそのまゝ転用されたと認められるものもあって，この点甚だ責任の軽くないことを痛感した次第であります」と記されているほか，『図書館辞典』の序文がそのまま転載されていることからも明らかである[99]。

表1　『図書館辞典』における言語別見出し語数

言語	見出し語数
英語	607
フランス語(Fr.)	22
ドイツ語(Ger.)	69
ラテン語(Lat.)	23
スペイン語(Sp.)	1

出典：『図書館辞典』をもとに，筆者作成。

青年図書館員聯盟が刊行した『図書館研究』には，しばしば『図書館辞典』の広告が掲載された[100]。また，間宮商店が刊行した書籍にも，巻末に広告を収録しているものがみられる[101]。書籍の広告には，次のとおり，紹介文が掲載されている。

本辞典ハ欧米ノ図書館ニ於テ使用スル用語ニ，日本ノ常用術語ヲ与ヘ，周到ナル説明ヲ附セルモノニシテ，此種図書トシテハ未ダ且ツテ見ザルモノナリ。名ハ辞典ナレドモ著者ノ意向ハ辞書式排列ニ依ル図書館員手引タルニアリ。集録シタル語彙ハ七百余ニ達セリ。附録トシテハ笹岡民次郎先生ノ寄稿ニカヽル，近代欧米著述家ノ雅号ト本名ハ弐千余名ヲ網羅シタルモノニシテ，目録係ハ勿論，文芸図書ヲ繙読スル際ノ好伴侶タリ。其他著者ノ注意ハ図書館員必須ノ智識タル「ローマ数字ノ読ミ方」「図書ノ形状名称ト寸法」「欧和校正記号法」等ヲ掲ゲアリ。尚標準ローマ字綴リニ依ル和欧索引ヲ巻末ニ掲ゲテ索引ノ便ニ供セリ。

詳細ハ内容見本御要求願度シ[102]

『図書館辞典』について評した文献としては，山本のものが，最も詳細である。まず，山本は，「図書館に関する辞典は未だ嘗て世に出たことがなくまさにこの辞典を以て嚆矢とせねばならぬ」として，類書がいまだなかったことを指摘している[103]。収録内容については，「図書のカードや図書の形状，製本，印刷に関する用語が多く，その解説は詳しいが，図書館そのもの，また図書館事務に関する用語が比較的少く，よし集められてあつても解説が簡単である」ことや，「図書館そのものに関する事項にも大分漏れてゐるものがあり，図書館令［，］簡易図書館，図書館創立事務，巡回文庫委員，図書館協会，図書館学校，図書館課などについては，一つも記されてゐない」といった問題点を指摘している[104]。訳語については，間宮が新たに付した訳語を好意的に評価しており，「かく意味の通ぜない用語が随分と多いが，それらについて編者が一々編者の対訳語を附してゐるのはこの種の用語運動に先鞭を着けたものとして編者の労を多とせざるを得ない」と述べられている[105]。最終的に，「この辞典が将来の図書館辞典の編纂に光を与へるものとして将たまた図書館家乃至図書愛好者の好箇の指針として，図書文化の上に大なる功果をもたらせることは，いふまでもない」と結論付けており，高く評価していることがわかる[106]。

また，用語の統一をめぐる議論のなかで，田中は，「同辞典の原稿を私の許に寄せて意見を需められた時に，私は出来得る限り在来通用の訳語を用ひられたく，図書館雑誌第十六号所載日本図書館協会選定訳語集を参照せられんことをお勧めし，且つ私自身の必要と認むる術語若干を補足したのであつた」と事情を説明している[107]。「間宮君のこの辞典は，その価値を訳語改定運動の上に求めなくとも，図書館用語を比較的漏れなく蒐集して一定の主義の下に排列した第一の成書であるといふ点に，十分真価を認めることが出来ると思ふ」としている[108]。

そのほか，陸窮子という筆名で記された記事にも，『図書館辞典』への言及がみられる。具体的には，「わが図書館界も長年の間にさうした運動の起るべき機運を醸成して来た。一昨年末に現れた，間宮不二雄氏の『図書館辞典』は，必然起るべき該運動の先駆者であると共に，わが国図書館事業発達史上の一つの一里塚でもある」とある[109]。以上をふまえれば，収録内容に問題点が指摘されることはあるものの，単行書として初の図書館に関する用語集として，高く評価されてきたと考えられる。

3.2.3　小河次吉『英和図書及図書館語彙』

著者の小河は，金沢高等工業学校に勤めたほか，金沢市立図書館の初代館長を務めたことが知られている人物であるが，詳しいことは検討されていない[110]。金沢市立図書館の単館史である『金沢市立図書館六十年誌』では，歴代館長の表に，初代館長として名前があるほか，年表には，1930年３月31日に「小川［ママ］次吉　大礼記念金沢市図書［ママ］初代館長となる」，1931年５月28日に「館長　小河次吉退職」となっている[111]。しかし，本文の記述は，後任の毎田周治郎に割かれており，小河の貢献については，定かでない。

刊行の意図としては，自序によれば，「自ら新生の心を以て斯業の入門より学ぶ可く意を決し，先づ其の第一歩として，近代の図書館界，出版界，其の他図書に関して使用されつゝあるあらゆる方面の術語に就き理解を持つ可く，欧米の是等用語集を基礎として我が日本図書館協会雑誌は素より其の初号より，其他私が求め得たる文籍より拾集したるものを合して，其の一々に就きての解釈と，一語にして多岐に渉る訳語の統一を計画して私自身の試練としたのである」とあり，自身の学習のためにまとめたものであることがわかる[112]。しかし，小河と同じ金沢高等工業学校に勤務していた赤松義麿に刊行を勧められ，和田万吉の校閲を経て，出版に至ったという。

『図書館語彙』は，1927年７月９日に，丙午出

版社から刊行された。四六判で，横書きとなっている。表紙には，「TECHNICAL TERMS USED IN BIBLIOGRAHIES AND BY THE BOOK, LIBRARY, AND PRINTING TRADES」とある。外函や背には，タイトルに加え，和田万吉校閲とある。目次はない。献辞と標題紙につづいて，青戸信賢による序，自序，凡例があり，本文は307ページである。凡例には，参考文献も示されており，『図書館辞典』が含まれている。巻末には附録が収録されている。『図書館辞典』と異なり，索引はない。奥付によれば，定価３円50銭である。

附録は，略語解，尊称一覧表，米国ポイント式（旧式活字名とポイント式称呼），書物の形の名称と寸法，図書館の図書分類略表（主要分類表の基本分類比較表），欧米主要出版地名及略語表，図書館目録編纂規則である。略語解は，見出し語に採録した語の略語を示したものと説明されているが，Afterwards（aft., aftw.）やDied（d.）など，見出し語に含まれていない語もみられる。分類表は，デューイ十進分類法，米国議会図書館分類法，帝国図書館分類法など，訳も含めて，８点が挙げられている。目録規則は，抜粋として，日本図書館協会の「和漢図書目録編纂概則」，東京帝国大学附属図書館の「洋書著者書名目録編纂略則」が収録されている。

見出し語数は，2,650語である。『図書館辞典』と同様に，見出し語の排列は，アルファベット順である。また，「を見よ参照」，「をも見よ参照」と捉えられる項目がある。フォントなど，印刷に関する用語には，図で例示がされている。そのほか，訳語に対して，（　）で解説が付されている項目がみられる。

また，用語の領域が略字で示されている。具体的には，書誌が［B.］，製本が［Bb.］，出版及書籍商が［Bo.］，図書館が［L.］，印刷及製版が［Pr.］である。『図書館辞典』と同様に，判定の妥当性はあるものの，領域ごとに見出し語を数えれば，表２のとおりとなる。なお，多くはないが，いくつかの見出し語では，複数の領域が併記されている。また，意図的なものかどうか定かではないが、［BL.］が付された見出し語が１語，［Br.］が付された見出し語が３語あった。表２から，図書館に関する用語よりも，製本や印刷及製版に関する語のほうが多いことがわかる。すなわち，タイトルにある「図書」と「図書館」でいえば，「図書」に重きがあることがうかがえる。この点については，小河が，製本や印刷に関心があったとみることができる。しかし，小河が採集した範囲において，図書館に関する用語よりも，製本や印刷に関する用語のほうが，多く使われていた可能性もある。

なお，「を見よ参照」と捉えられる見出し語は，75語ある。このうちの多くは，倒置形で示した見出し語となっている。

表2　『図書館語彙』における領域別見出し語数

領域	見出し語数
書誌［B.］	66
製本［Bb.］	471
出版及書籍商［Bo.］	51
図書館［L.］	401
印刷及製版［Pr.］	608

出典：『図書館語彙』をもとに，筆者作成。

『図書館雑誌』には，丙午出版社による広告が掲載されている。具体的には，「本書は図書館用語，製本用語，印刷用語，目録用語，出版及書肆用語等を含んだ英和辞書で日本で最初の出版である［。］単に読書家，書籍愛好者だけでなく広く書籍を取扱ふ人々の為に忠実なる師友である」と紹介されている[113]。

『図書館語彙』を評したものについては，鈴木賢祐による書評がある[114]。冒頭で，鈴木も「本書の編者小河氏に関しては，筆者は氏が金沢高工の図書館員であるといふこと以外，何等の知識ももつてゐない」と述べていることから，当時の図書館界においても，さほど知られた人物ではなかったと推測される[115]。まず，「書背，標題紙，巻頭，天，紙質など，すべて図書館的取り扱ひに適するやうにできてゐる点，共に『図書館辞典』と略その規を一にしてゐる」としているように，装訂において，『図書館辞典』が参考とされていることがうかがえる[116]。

長所としては，「語彙の豊富なこと，用語を分類して書誌，製本，出版及書籍商，図書館，印刷及製版，及び一般の諸用語とし，一般用語の外には夫々の記号を附けてゐること，それから訳語の大体においてよく洗練されてゐること，等である。活字の各字体の項には夫々の見本が示してある点，随所にカットを挿んで使用者の理会を助けてゐる点なども亦特筆するに足りやう」と多くの事項を挙げている[117]。また，附録についても，「如何にも図書館人らしい

親切な，気の利いた思ひ附きである，しかもそれらが一つも『図書館辞典』の附録と重複してゐないのは一層いゝ」としている[118]。

以上の記述からもうかがえるように，鈴木は，『図書館辞典』を比較対象として想定している。比較したときの差異としては，「『図書館辞典』と本書との特色の差違らしいものを求めるならば，前者の啓蒙的なのに対して後者は釈義的であり，かれにおいては用語の統一を図らうとする，編者の熾烈な熱意が特に強く感ぜられるのに対して，これにおいてはいづれかと云へば語義の解明に努めやうとする，編者の冷徹な意図が基調をなしてゐるかの観がある。その外かれは英，独，仏，羅，西の諸語に跨つてゐるに対し，これはその名の示す通り英語のみにその範囲を限つてゐる」ということを挙げている[119]。

一方，課題としては，location，book numberなどにみられる訳語の妥当性，admission-feeとlibrary admission-feeなどの訳語間の不一致，Library of Congress Classificationなど，重要と思われる語の欠落，分類法における固有名詞のキャタピライズを挙げている。ただし，locationの訳語や，Library of Congress Classificationの欠落については，その後，問題がなかったことを訂正して詫びている[120]。

そのほか，『図書館語彙』については，間宮の『製本術』でも言及がみられる[121]。この著作には，製本に関する用語がまとめられている箇所があるが，そこで，間宮は『図書館語彙』が参考となることを述べている[122]。以上から，『図書館辞典』と同様に，『図書館語彙』も，図書館界において，好意的に評価されてきたものと捉えられる。

3.3　図書館用語集の比較

以上の３つの用語集を比較したとき，次のことが特徴として指摘できよう。まず，評価という点からいえば，言説の整理で提示した文献もふまえれば，用語集の刊行は，問題点が指摘されることはありつつも，高い評価をもって，図書館界に受け入れられたといえる。

次に，いずれも訳語の整理として，編纂したことがわかる。すでにみたように，図書館に関する用語は，翻訳語が中心であるということは，繰返し指摘されていることであった。したがって，図書館用語の統一においては，まず，訳語を整理することが必然であったといえよう。この点について，1930年代以降の用語集が，訳語ではなく，日本で用いられている用語の整理をもとにしていることは，対照的であるといえよう。

さらにいえば，英語が中心であることも，明らかである。これは，日本の図書館界が英米を範としてきたことの現れであろう。このため，いずれも横書きであり，見出し語をアルファベット順に排列している。『図書館辞典』から推測するならば，英語に次いで多く用いられた言語は，ドイツ語であるといえる。

収録されている領域についてみれば，いずれも図書館に関する用語だけでなく，書誌学や印刷，製本，出版なども採録範囲としていることは，特徴的である。とりわけ，『図書館語彙』は，図書館に関する用語よりも見出し語数が多い領域がみられた。図書館用語をめぐる言説でも要望されていたように，これらの領域は，図書館に極めて近しく，業務で参照する際にも，収録されていることが望ましいと判断されていたと考えられよう。

また，後年に刊行されたものであるほど，見出し語数が拡大していることがわかる。「図書館用語」は370語，『図書館辞典』は追録を含めて721語，『図書館語彙』は2,650語であるから，後年になるほど，多くの見出し語が採録する必要があると判断されたといえる。

なお，訳語に着目すれば，「図書館用語」が訳語を一つに絞っているのに対し，『図書館辞典』や『図書館用語』は，複数の訳語を提示している。間宮は，記号を用いて，訳語の意図の違いを示しているものの，訳語を複数提示することは，用語の統一という点では，効果的ではなかった可能性があろう。

採録された見出し語の重複についていえば，すべての用語集に共通してみられる見出し語は，表３のとおりであり，139語ある。なお，重複の判断については，語義が変わらない範囲で，大文字・小文字の相違，単数／複数の相違，英米の綴りの相違，約物の有無は，無視している。表３に掲げた見出し語は，近代における基本的な語彙として位置づけられるものであろう。

なお，「図書館用語」の見出し語のうち，『図書館辞典』と重複するものは149語，『図書館語彙』と重複するものは344語である。同様に，『図書館辞典』の見出し語のうち，『図書館語彙』にも採録されているものは510語である。ここから，後年に著された用語集は，既存の用語集の見出し語を参考とし，積

極的に採録している様子がうかがえる。さらにいえば，『図書館辞典』や『図書館語彙』が，しばしば，評価ないし活用されてきたといえるが，「図書館用語」は，その基盤となったとみられるもので，基本的な語彙を提示した点で重要であるといえよう。

ただし，見出し語が共通しているからといって，訳語が同一であるとはいえない。むしろ，訳語には，相違がみられると捉えるべきである。表３に示した見出し語のうち，試験的に最初の10語について，訳語を比較したものが表４である。表４から明らかなように，訳語が完全に一致しているものは少なく，若干の相違がみられるもののほうが多い。すなわち，英語として，基本的な語彙は，ある程度の合意がみられるものの，訳語については，試験的に示されている段階にあったということができよう。

4.　結論と今後の課題

4.1　結論

本論文では，1920年代以前に，日本で刊行された図書館用語集の特徴について，明らかにすることを目的として，用語集と図書館用語に関する文献を確認した。用語集の検討に先立って，図書館用語をめぐる言説について整理を行い，図書館用語をめぐる議論は，1910年代から第二次世界大戦終戦に至るまで絶えず展開されていたこと，それに伴って，個人や団体によって，用語集の編纂が試みられてきたことを確認した。

つづいて，用語集の分析を行った。まず，近代に刊行された用語集を概観したうえで，「図書館用語」，『図書館辞典』，『図書館語彙』の３点について検討した。個別の内容をふまえて，３点を比較した結果，次のことが明らかとなった。まず，いずれの用語集も，高い評価をもって，図書館界に受け入れられた。また，訳語の整理として，用語集は登場してきた。言語は，英語が中心であり，次いで，ドイツ語が多くみられた。見出し語を領域別にみれば，図書館に関する用語だけでなく，書誌学や出版などの領域に属する用語も多くみられた。見出し語数については，後年に刊行されたものであるほど多かった。さらにいえば，後年に著された用語集は，既存の用語集の見出し語を参考とし，積極的に採録している様子がうかがえた。ただし，見出し語が共通しているものでも，訳語には相違がみられた。

4.2　今後の課題

本論文の成果を進展されるためには，検討対象の拡張が有効であろう。たとえば，本論文では対象としなかった1930年代以降の用語集を分析することは有意義である。また，書誌学に関する辞典における図書館用語の確認や，戦後の用語集との相違を明らかにすることも意味があることであろう。

また，活用可能性を高めるという点からすれば，検討した用語集について，総索引が作成されることも有効であろう。和文索引を欠くものがあることも

表3　3つの用語集に共通してみられる見出し語

accession ／ accession book ／ accession number ／ added entry ／ alphabetical order ／ alphabetico-classed catalog ／ alternative title ／ analytical entry ／ apoconym ／ author ／ author card ／ author catalog ／ author entry ／ author mark ／ author table ／ bastard title ／ bibliography ／ binder's title ／ block book ／ book binding ／ book card ／ book number ／ book plate ／ book-supports ／ borrower's card ／ borrower's register ／ branch library ／ broadside ／ call number ／ capital ／ caption ／ caption title ／ card ／ card case ／ card catalog ／ catchword entry ／ charging system ／ children's library ／ chronogram ／ circulating library ／ class ／ class list ／ class mark ／ classed catalog ／ classification ／ collation ／ collected works ／ compiler ／ compound name ／ contents ／ copyright date ／ corporate entry ／ cover title ／ cross reference ／ date ／ decimal classification ／ delivery station ／ dictionary catalog ／ dissertation ／ document ／ duplicate ／ edition ／ editor ／ entry ／ entry word ／ expansive classification ／ ex-libris ／ facsimile ／ fiction ／ finding list ／ fixed location ／ free public library ／ frontispiece ／ half title ／ headline ／ heading ／ illuminated book ／ illustration ／ incunabula ／ inter-library loans ／ label ／ lending library ／ librarian ／ library ／ library economy ／ library organization ／ loan system ／ magazine ／ main entry ／ manuscript ／ map ／ monograph ／ national library ／ new series ／ nickname ／ nom de plume ／ notation ／ novel ／ open shelf system ／ pamphlet ／ print ／ pseudonym ／ public document ／ public library ／ publisher ／ reading room ／ reference book ／ reference card ／ reference library ／ report ／ running title ／ serial ／ serial number ／ series ／ series entry ／ series note ／ sheaf catalog ／ shelf list ／ signature ／ size notation ／ sobriquet ／ subtitle ／ subject ／ subject catalog ／ subject entry ／ subscription library ／ surname ／ systematic catalog ／ table ／ title entry ／ title-page ／ tome ／ translator ／ transliteration ／ travelling library ／ two-book system ／ typography ／ volume ／ year-book

出典：「図書館用語」,『図書館辞典』,『図書館語彙』をもとに，筆者作成。

表4　共通してみられる見出し語の訳語の相違

見出し語	図書館用語	図書館辞典	図書館語彙
accession	受入	受入	図書受入
accession book	受入簿	図書受入原簿	図書受入簿，図書原簿，図書台帳
accession number	受入番号	受入番号	図書受入番号，図書登録番号
added entry	附加記入	副出	附加記入，副記入
alphabetical order	エビシ順	アルファベット順	アルファベット順，A. B. C. 順
alphabetico-classed catalog	エビシ順分類目録	アルファベット順分類目録	アルファベット順分類目録
alternative title	一名(書名の)	副標題〔転換標題〕	一図書の別名，一名
analytical entry	解折記入	分折題名記入	分析記入，分出記入
apoconym	略名	姓名変化法	略名
author	著者	著者	著者，著作者，著述家，作家

出典：「図書館用語」,『図書館辞典』,『図書館語彙』をもとに，筆者作成。

ふまえれば，総索引の作成によって，検索が容易になるとともに，訳語のゆれなども明示されることになろう。

注

1）日本図書館学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典』丸善, 1997, 244p.

2）図書館用語辞典編集委員会編『最新図書館用語大辞典』柏書房, 2004, 643p.

3）日本図書館協会図書館用語委員会編『図書館用語集』日本図書館協会, 1988, 396p.

4）小田光宏「図書館用語の表現に関する研究：三つの用語事典の見出し語表記に対する考察」『図書館学』no. 86, 2005. 3, p. 35-43.

5）堀込静香「索引と索引語と検索：図書館学テキストの内容索引の分析と考察」『鶴見大学紀要：人文・社会・自然科学編』no. 38, 2001. 3, p. 91-102.

6）石川敬史「移動図書館成立の序論的考察：1940年代後半から1950年代前半における活動名称を中心に」『筑波大学教育学系論集』vol. 44, no. 1, 2019. 10, p. 91-103.

7）間宮不二雄編『欧和対訳図書館辞典』文友堂書店, 1925, 1冊.

8）小河次吉『英和図書及図書館語彙』丙午出版社, 1927, 360p.

9）石井敦「社団法人の時代」日本図書館協会編『近代日本図書館の歩み：本篇：日本図書館協会創立百年記念』日本図書館協会, 1993, p. 47-65. 該当箇所は，p. 64.

10）石井敦「戦時体制下の協会」日本図書館協会編『近代日本図書館の歩み：本篇：日本図書館協会創立百年記念』日本図書館協会, 1993, p. 65-97. 該当箇所は，p. 88-90.

11）大塚敏高「図書館用語について：用語委員会報告」『図書館評論』no. 19, 1978. 9, p. 90-99.

12）図書館問題研究会編『図書館用語辞典』角川書店, 1982, 777p.

13）竹内悊「三つの特徴」『みんなの図書館』no. 71, 1983. 4, p. 44-45.

14）山本昭，落合佐和子「図書館学」『専門用語研究』no. 18, 1999. 9, p. 3-7.

15）佐藤貢「我が国の図書館関係の出版物」『IFEL図書館学』no. 2, 1953. 1, p. 31-46.

16）間宮不二雄「明治・大正年間に出た図書館関係図書」『日本古書通信』vol. 16, no. 3, 1951. 3, p. 2-3. 大正期までを対象としているため，『図書館語彙』は含まれていない。

17）小野則秋『日本図書館史』補正版，玄文社, 1973, 329p. 該当箇所は，p. 293. この著作は，次の文献がもとになっているが，当該箇所の記述は変わらない。小野則秋『日本図書館史』蘭書房, 1952, 329p. 該当箇所は，p. 293.

18）大佐三四五『図書館学の展開』丸善，1954, 329p. 該当箇所は，p. 179.

19）武居権内『日本図書館学史序説』早川図書, 1960, 477p. 該当箇所は，p. 262.

20）弥吉光長『参考図書の解題』理想社，1955,

259p. 引用箇所は，p. 66.
21）富山県図書館協会編『間宮文庫図書解題』富山県図書館協会, 1991, 263p.
22）同上, p. 11-12.
23）前掲21), p. 12.
24）「間宮不二雄」日本図書館文化史研究会編『図書館人物事典』日外アソシエーツ, 2017, p. 252-253. ；「間宮不二雄」日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典』第5版, 丸善出版, 2020, p. 236.
25）『図書館と人生：間宮不二雄古稀記念』間宮不二雄氏古稀記念会, 1960, 290p. ；小野則秋「藍綬褒章の人・間宮不二雄氏を語る」『図書館界』vol. 13, no. 5, 1961. 12, p. 154-158. ；前田哲人編『間宮不二雄の印象』前田哲人, 1964, 240p. 石山洋「間宮不二雄氏の生涯と業績」『図書館界』vol. 22, no. 5, 1971. 1, p. 161-165. ；山下栄「青年図書館員聯盟と書記長間宮さん」『図書館雑誌』vol. 65, no. 2, 1971. 2, p. 73-76. ；村上清造「間宮先生を偲びて」『図書館雑誌』vol. 65, no. 2, 1971. 2, p. 76-78. ；真田佐和子「父・間宮不二雄略年譜」『図書館雑誌』vol. 65, no. 2, 1971. 2, p. 79-81. ；太田久夫「間宮先生の思い出及び略歴」富山県図書館協会編『間宮文庫図書解題』富山県図書館協会, 1991, p. 3-4. ；石山洋「外野から叱咤激励した図書館用品店主間宮不二雄」『日本古書通信』vol. 68, no. 9, 2003. 9, p. 20. この文献は，その後，次の著作に収録された。石山洋『源流から辿る近代図書館：日本図書館史話』日外アソシエーツ, 2015, 264p. 該当箇所は，p. 90-92.
26）もりきよし「図書館の充実と振興は故人終生の願いであり……」『図書館雑誌』vol. 65, no. 2, 1971. 2, p. 70-73. 該当箇所は，p. 70. また，次の文献にも，同様の趣旨の記述がある。もりきよし「外から図書館を愛した人：間宮不二雄先生」『図書館雑誌』vol. 75, no. 9, 1981. 9, p. 572-573. 該当箇所は，p. 573. この論考は，その後，次の文献に収録されている。もりきよし「間宮不二雄：外から図書館を愛した人」石井敦編『図書館を育てた人々：日本編Ⅰ』日本図書館協会, 1983, p. 131-138. 該当箇所は，p. 135.
27）小黒浩司「間宮不二雄と中国：1936年の上海訪問を中心に」『図書館学会年報』vol. 36, no. 1, 1990. 3, p. 22-27.
28）志保田務「間宮不二雄と『図書館雑誌』，『図書館研究』」『桃山学院大学経済経営論集』vol. 46, no. 4, 2005. 3, p. 1-17. 該当箇所は，p. 5.
29）國枝裕子「間宮不二雄の学校図書館論：山形市男子国民学校の学校図書館実践に注目して」『南九州大学人間発達研究』vol. 1, 2011. 3, p. 13-24.
30）「明治四十三年度総会」『図書館雑誌』no. 11, 1911. 4, p. 57-62. 該当箇所は，p. 60.
31）同上, p. 60.
32）この委員会の発足は，新聞でも報じられている。「図書館用語調査会」『朝日新聞』朝刊, 1911. 4. 10, p. 2.
33）「図書館用語：洋書ノ部」『図書館雑誌』no. 16, 1912. 12, 附録.
34）今井貫一「図書館管理様式の画一及様式の研究」『図書館雑誌』no. 19, 1914. 1, p. 80-86.
35）同上, p. 86.
36）前掲34)，p. 86.
37）「府県立図書館長会議」『図書館雑誌』no. 36, 1918. 10, p. 64-68.
38）前掲7), p. iii.
39）前掲7), p. iii-iv.
40）山本八三「図書館及び図書に関する著作三種」『週刊朝日』vol. 9, no. 9, 1926. 2, p. 18-19.
41）田中敬『図書学概論』富山房, 1924, 522p.
42）新村出『典籍叢談』岡書院, 1925, 499p.
43）田中敬「訳語の語義に就て山本氏の批評に答ふ」『図書館雑誌』no. 81, 1926. 7, p. 10-11.
44）木村文麿「用語統一問題に関聯して我国図書館界の整備を促す」『図書館雑誌』no. 85, 1926. 12, p. 5-6.
45）同上, p. 6.
46）陵窮子「図書館無根草」『図書館雑誌』vol. 21, no. 3, 1927. 3, p. 100-101.
47）同上, p. 100.
48）「第二十二回全国図書館大会記事」『図書館雑誌』no. 110, 1929. 1, p. 16-49.
49）間宮不二雄「図書館統計ノ用語，様式統一ノ急務」『図書館研究』vol. 2, no. 2, 1929. 4, p. 337-338.
50）「第二十七回全国図書館大会記事」『図書館雑誌』vol. 27, no. 7, 1933. 7, p. 157-186.
51）同上, p. 175.
52）「理事会」『図書館雑誌』vol. 28, no. 1, 1934.

1, p. 32.
53）「昭和十四年度社団法人日本図書館協会総会議事録」『図書館雑誌』vol. 33, no. 7, 1939. 7, p. 193-200. 引用箇所は，p. 198.
54）「第十次帝国大学附属図書館協議会」『図書館雑誌』vol. 27, no. 12, 1933. 12, p. 352.
55）「第十次帝国大学附属図書館協議会仮議案及小委員会」『図書館雑誌』vol. 28, no. 1, 1934. 1, p. 27-29.
56）「第十一次帝国大学附属図書館協議会」『図書館雑誌』vol. 28, no. 12, 1934. 12, p. 358-359.
57）『図書館用語集』帝国大学附属図書館協議会, 1935, 36p.
58）竹林熊彦「目録法ところどころ」『図書館雑誌』vol. 27, no. 2, 1933. 2, p. 29-33.
59）同上, p. 31.
60）前掲58), p. 33.
61）武田虎之助「目録法のイロハ（一）」『図書館雑誌』vol. 27, no. 5, 1933. 5, p. 95-100. ；武田虎之助「目録法のイロハ（二）」『図書館雑誌』vol. 27, no. 6, 1933. 6, p. 130-140. ；武田虎之助「目録法のイロハ（三）」『図書館雑誌』vol. 27, no. 8, 1933. 8, p. 229-236.
62）同上, 1933. 5, p. 95-96.
63）前掲61), 1933. 5, p. 96.
64）竹林熊彦「図書館用語の統一について：併せて武田虎之助氏の教を請ふ」『図書館雑誌』vol. 27, no. 12, 1933. 12, p. 341-345, 354.
65）同上, p. 341.
66）前掲64), p. 344.
67）前掲64), p. 345.
68）鈴木賢祐「図書館用語の問題をめぐつて」『図書館雑誌』vol. 28, no. 4, 1934. 4, p. 109-114.
69）同上, p. 109.
70）前掲68), p. 114.
71）中野武雄「図書館初年兵のお願ひ」『図書館雑誌』vol. 36, no. 8, 1942. 8, p. 612.
72）同上.
73）「臨時研究企画部委員会」『図書館雑誌』vol. 37, no. 4, 1943. 4, p. 283.
74）「臨時研究企画部図書館用語統一委員会」『図書館雑誌』vol. 37, no. 6, 1943. 6, p. 448-449.
75）「図書館用語統一委員会（臨研）（第二回）」『図書館雑誌』vol. 37, no. 8, 1943. 8, p. 553.
76）「日記抄」『図書館雑誌』vol. 37, no. 11/12, 1943. 11/12, p. 726, 741.
77）「図書館用語統一委員会」『図書館雑誌』vol. 37, no. 10, 1943. 10, p. 659-660.
78）「図書館用語調査委員会（臨研）」『図書館雑誌』vol. 38, no. 1, 1944. 1, p. 29.
79）『図書館用語集：主査委員会案』日本図書館協会臨時研究企画部図書館用語調査委員会, 1944, 18p.
80）毛利宮彦『図書館学綜説：図書の整理と運用の研究』同学社, 1949, 457p. p. 436に，その旨が説明されている。
81）笹岡民次郎「図書及印刷用語」『図書館雑誌』no. 24, 1915. 8, 附録.
82）Mamiya Fujio, Yamamoto Hiroshi「図書館員必携I」『図書館雑誌』vol. 21, no. 4, 1927. 4, 附録.
83）前掲57).
84）前掲79).
85）植村長三郎『書誌学辞典』教育図書, 1942, 580p. 引用箇所は，p. 13.
86）土井重義「植村長三郎著『書誌学辞典』を評す」『図書館雑誌』vol. 37, no. 1, 1943. 1, p. 24-25.
87）たとえば，前掲11) や前掲14) の文献で触れられているほか，前掲6) の研究でも参照されている。
88）古典社編輯部編『書物語辞典』古典社, 1936, 171p.
89）日本印刷学会編『英和印刷・書誌百科辞典』印刷雑誌社, 1938, 784p.
90）田中敬, 毛利宮彦『内外参考図書の知識』図書館事業研究会, 1929, 325p. 引用箇所は，p. 1.
91）波多野賢一, 弥吉光長編『研究調査参考文献総覧』朝日書房, 1934, 877p.
92）同上, p. 47.
93）天野敬太郎「図書館用語辞彙ノ解題略」『図書館研究』vol. 7, no. 4, 1934. 10, p. 491-499.
94）同上, p. 492.
95）前掲93), p. 492.
96）山下栄「司書検定試験受験ノ栞」『図書館研究』vol. 11, no. 4, 1938. 10, p. 457-476. 引用箇所は, p. 475.
97）Dewey, Melvil. Decimal classification and relativ index for libraries, clippings, notes, etc. 10th edition, Forest Press, 1919, 936p.

98）間宮不二雄編『欧・中・和対訳図書館大辞典』ジャパン・ライブラリー・ビューロー, 1952, 661p.
99）同上, p. v-x.
100）たとえば，次の文献がある。「図書館参考書：間宮商店発行及取扱図書目録」『図書館研究』vol. 1, no. 2, 1928. 4, p. 255. ；『図書館研究』vol. 1, no. 1, 1928. 1, p. 99.
101）たとえば，次の文献がある。鞠谷安太郎, 中島猶次郎編『目録編成法』間宮商店, 1926, 28p.
102）同上,［ノンブルなし］。巻末に掲載されている。
103）前掲40), p. 18.
104）前掲40), p. 18.
105）前掲40), p. 18.
106）前掲40), p. 18-19.
107）前掲43), p. 10.
108）前掲43), p. 11.
109）前掲46), p. 101.
110）「小河次吉」日本図書館文化史研究会編『図書館人物事典』日外アソシエーツ, 2017, p. 63.
111）金沢市立図書館編『金沢市立図書館六十年誌』金沢市立図書館, 1994, 261p. 引用箇所は，p. 251. 年表については，次の文献と一致している。『大礼記念金沢市立図書館案内』大礼記念金沢市立図書館, 1936, 44p. 該当箇所は，p. 2-4.
112）前掲8),［ノンブルなし］.「自序」に記されている。
113）「英和図書及図書館語彙」『図書館雑誌』vol. 21, no. 8, 1927. 8, p. 258.
114）鈴木賢祐「小河次吉氏編『和英図書及図書館語彙』」『図書館雑誌』vol. 21, no. 9, 1927. 9, p. 273-275.
115）同上, p. 273.
116）前掲114), p. 273.
117）前掲114), p. 273.
118）前掲114), p. 274.
119）前掲114), p. 274.
120）鈴木賢祐「正誤及訂正」『図書館雑誌』vol. 21, no. 11, 1927. 11, p. 338.
121）間宮不二雄『製本術：図書館員及入門者の手引』間宮商店, 1939, 72p.
122）同上, p. 30.